

◆水明インターネット句会◆																			
令和七年六月																			
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
あめんぼう搔けども水の輪を出でず	難聴の耳にまつすぐ蟬の声	夏帽や旅の途中の駅ピアノ	ひっそりと自刃の句碑や青嵐	日雷宙に弧を画く打球かな	今じゃもう舞はぬ蛍や祇王祇女	遠雷や俄かに鳥の羽繕い	モネの絵に重ね睡蓮見て居りし	顔見えぬほどアイリスを抱いた客	蚊遣火を腰に狭庭の草を引く	にわか雨宿れば鹿の子ついてくる	古本は樹に戻りつつ梅雨に入る	解禁の竿の連なる鮎の川	昼寝するパンダの尻にお別れす	相合傘私の肩濡れあやめ咲く	いつまでも途切れぬ話火取虫	風薫る君の眼を見ずプロボーズ	腹ぺこや待てぬくちばし燕の子	夕焼に飛行機白く照り返し	短夜の交代するやホームラン

◆水明インターネット句会◆																				令和七年六月																			
21	辞書を繰る甚平の背な垣根越し	22	奥宮の木暮るる道や苔生せり	23	明日は明日風の吹くまま黒揚羽	24	梅雨晴やファンタジックのガラス展	25	夏花やちょこつと幸せ老いの庭	26	子供傘じつと見ている雨蛙	27	売り切れてはや店じまひ夕焼雲	28	宵宮や石鹼の香と擦れ違ふ	29	ソーダー水友達以上恋未満	30	夏の夕ほろ酔いかげん駅ピアノ	31	帰省子のまづ大の字のごろ寝かな	32	解禁の竿の連なる鮎の川	33	大の字になりて仰げる新樹かな	34	父の日や川獺瞼に手酌かな	35	張り手には張り手で返す青蛙	36	石庭の渦巻凜と風薫る	37	縁側の節目に残る麦こがし	38	行進のごとく向日葵立ち並び	39	落ちてなほ滝を昇るや夫婦鯉	40	白球を追ひ長嶋茂雄梅雨に逝く

◆水明インターネット句会◆																				令和七年六月
41	父の日や里の名入りの古風呂敷																			
42	夏来る戦隊モノのロケ現場																			
43	夏来たりみつ豆の匙密やかに																			
44	ひと口で済まぬビールや友の通夜																			
45	新たな命の知らせ田植時																			
46	上げ底の梅雨や今日また傘いらず																			
47	黒南風や音無き匍草の鉾																			
48	梅雨寒や己一人の美術館																			
49	喉しびる泡の旨さよ朝の生																			
50	雨音のリズムに踊るバケツかな																			
51	紫陽花や鯉のうねうね見えて居る																			
52	五月雨るる能登の棚田のころ旅																			
53	置き去りの靴やかたばみ咲く野原																			
54	父の日の「お嫁になんか行かないわ」																			
55	町内の一斉掃除梅雨晴間																			
56	ふと見れば花にとまれる夏の蝶																			
57	苦は楽に青葉をつかむ手の如く																			
58	灰色の湿度が肥す梅雨曇																			
59	食感で選ぶ肴や海月食む																			
60	白服や一泊の旅風まかせ																			

◆水明インターネット句会◆																				令和七年六月
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	
咲き満ちて夕べの色に花芙蓉	笛吹の川面に映ゆる徒歩鶉かな	夏風邪や玄関先に朝採れ野菜	醜さを知るか知らでか羽抜鶏	落雷や地震の如く家揺るる	緑蔭に紅白帽の豆画伯	七人の聖書読む会百合の部屋	夏めくや戸を少し開け風を入れ	鳶風に抗ふ岬（さき）の連鷺草	真青な空の天蓋八重桜	毒抜いて青梅の如く妻となる	紫陽花にしづくひと粒十つぶに	糸蜻蛉捕らへんとして風に消ゆ	あご飛んでひかる海へと舵を切る	麦の秋猫の大群やつて来る	葉の色に身を潜めたる青蛙	夏休み推理三昧金田一	妻逝きて残る昭和の夏帽子	二言を言わぬ鯰の面構へ	短夜や閉店間際二割引き	

◆水明インターネット句会◆																				令和七年六月
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	
梅雨晴れの真昼の月の孤独かな	テンガロンハットで掬ふ石清水	皮脱ぎしトマト涼しや最後の香	邪気の無き子らの視線に蛍かな	暑き日や無防備の犬腹を出す	トルコブルー海の色なるソーダ水	スーツの裾早足に揺れ小判草	老鷲や武者の行きたる切通し	さみだるる「赤い殺意」のロケの家	哲学顔なに猿猴でさ梅雨晴間	雨の輪の静かに重なる植田かな	葉の色に身を潜めたる青蛙	誰にでも心折れる日桜桃忌	極彩のネオン眩しや夏夜風	踏まないで葉を閉じ眠る片喰草	青葉風捕らえて見れば鮑屑	毒を秘め傘照り映ゆる梅雨茸	木苺を含み幼き友の顔	カツコウの初音消される朝の雷	梅雨寒し賞味期限みな間近	

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	◆水明インターネット句会◆ 令和七年六月
				エニシダの黄の明るさよ華やぎよ	梅雨晴れやそよ風重く湿りたる	六月や母の迎えし傘に入る	合唱の声の低さや梅雨に入る	紋白蝶じょうろの水と戯れる	黒塀に赤い蹴出しや水を打つ	恥じらひて露に紫陽花色変えし	新参の色白ジョガー夏浅し	蚤刺され貧乏揺すりで膝踊る	黒南風や音無き匍草の鉾	蒼き薔薇棘は密かに秘めやかに	青葉風小紋に薫る江戸の粋	かちわりや五回裏にはぬるい水	猛暑来る身にまとうものすべて罰	二日酔ひ黴の食パンいらんかね	楚々と立つ十薬群れて猛々し	